

# 『万葉集』中央方言部分の借訓にかいまみる 才段連体形の終極

白鳥詩織

角川ドワンゴ学園 N/S 高等学校研究部人文科学グループ (在籍時高校3年)

## 要旨

日琉祖語の連体形 \*-o は、東歌・防人歌と中央方言の木簡では依然として -(w)o (才段連体形) も呈す。本稿の主張することには、万葉集中央方言部分の一借訓も才段連体形の列につらなる。本稿が支持する訓が従来仮定する存在が不確かな牛言葉 \*NIPO 「止まれ！」には、いぜん懐疑的な万葉学者もある。しかし、竹生政資氏・西晃央氏の主張とりいれ、牛を留めることが馱載を連想させたと仮定すれば、\*ni op-wo 「荷負ホ」の規則的な母音脱落形 \*NIPWO としてよまれた文字列\* (留牛) の借訓として説明できるので、従来説の問題点は解消する。本稿は、中央方言の才段連体形は歌語でなく、卑俗な語感を有したとも主張する。巻11・2743 或本での文字列 (留牛鳥) は卑俗な生活を連想させることを意図して使用されたが、巻3・443 の文字列 (牛留鳥) にこれはみいだされない。これは、上代中央方言話者が才段連体形とともにいきた時代が、徐々に終幕にいたりつつあったためである可能性がある。われわれはこれを通して、才段連体形が8世紀中ごろまでには中央方言から喪失されつつあったことを確認できる。本稿は、従来の出土文字資料の注視のみならず、訓字主体表記を検証することによっても、才段連体形の中央方言における使用実態を知ることができるとしめした。

## 1. 問題となる表記習慣

### 1.1. (牛留鳥) は音仮名をふくまない

大伴三中の詠んだ挽歌、『万葉集』巻3、国歌大観番号443にある文字列 (牛留鳥) は難読<sup>1</sup>であり、このよみは諸家一致しない。参考に供するため、同歌を標準三段方式で (1) に

---

<sup>1</sup> かつて、用例がないが (牛) を (牽) の異体字であるとし、「鳥を留めるもの (=網)」を

掲載する。

(1) 天雲之 向伏國 武士登  
**AMAKUMO=nö** **MUKA<sup>m</sup>BUS-U KUNI=NÖ** **MONÖNÖPU =tö**  
天の雲=GEN 遠く横たわる-ATTR 国=GEN 物部 =COM  
『天雲が遠く横たわる国の武人と……』

所云人者 皇祖 神之御門爾  
**IPAY-URU PÎTÖ pa** **SUMÊRÖKÎ=NÖ KAMÎ=nö** **MÎKA<sup>m</sup>DÔ =ni**  
言う.PASS-ATTR 人 TOP 天皇=GEN 神=GEN 御殿 =DAT  
「……言われる者は、天皇の神聖なる御所で……」

外重爾 立候 内重爾  
**TÔNÖPÊ =ni** **TATI-SAMORAP-Î** **UTINÖPÊ =ni**  
門外 =DAT 立ってそこで警備する-INF 宮殿 =DAT  
「……門外に立ち警衛をして、門中で……」

仕奉 玉葛 弥遠長  
**TUKAPÊ-MATUR-I-TE** **TAMAKA<sup>m</sup>DURA** **IYA-TÖPONA<sup>m</sup>GA-KU**  
任務を果たす-INF-SEQ 枕詞 一段と長い-ADV  
「……官に奉仕して、(玉鬘のように) 一段と長く……」

祖名文 継往物与 母父爾  
**OYA=NÖ na mo** **TU<sup>m</sup>GÎ-YUK-U MONÖ =tö** **OMOTITI =ni**  
祖先=GEN 名 ADD 継承する-ATTR もの =COM 父母 =DAT  
「……祖先のほまれを継ぎ伝えるのだ』と父母や……」

妻爾子等爾 語而 立西日従  
**TUMA =ni KÔ<sup>m</sup>DÖMO =ni** **KATARAP-Î-TE** **TAT-I-n-i-si PÎ=YÔRI**  
配偶者 =DAT 子-PL =DAT 語る.CONT-INF-SEQ 出発する-INF-INC-INF-PST=ABL  
「……妻や子どもたちに繰り返し話して出立した日から、……」

---

「牛(=牽)く」と解釈されることから、**PÎKU AMÎ=NÖ** との訓をこころみる説があった (cf. 佐々木 1927)。しかし、前後の文脈との明晰な関係がみあたらないこと、また、仮定が冗長であることから、この説はしだいに支持をうしなった。

<sup>2</sup> 訳文および訓は新編全集を参考にし、現代仮名遣を使用した。

帶乳根乃 母命者 齊忌戸乎  
**TARAtine=nö** **PAPA=NÖ MÎKÖTÖ pa** **IPAPÎ<sup>m</sup>bë =wo**

枕詞 母=GEN HON TOP イワイベ=ACC

「……(たらちねの)その母がみが齋瓮を……」

前坐置而 一手者 木綿取持  
**MAPÊ =NI SUWE-OKÎ-te** **KATATE =NI pa** **YUPU TÔRI-MOT-I**

前 =DAT 置いておく-INF-SEQ 片手 =DAT TOP 木綿 手に持つ-INF

「……前に据え置き、片手には木綿を持ち……」

一手者 和細布奉 平  
**KATATE =NI pa** **NIKÎTAPÊ MATUR-I** **TAPÎRAKË-KU**

片手 =DAT TOP ニキタエ 捧げる-INF 穏やか-ADV

「……片手には和袴を捧げ、つつがなく……」

間幸座与 天地乃 神祇乞禱  
**maSAKÎKU MAS-E =tö** **AMËTUTI=nö** **KAMÏ =WO KÖPÎ NÖM-Ë**

幸せに いらっしゃる-IMP 天地=GEN 神 =ACC 祈願する-CSL

「……すこやかにいてくれと天地の神に祈りを捧げ、……」

何在 歲月日香 茵花  
**IKA-NARA-M-U** **TÖSITUKÏPÎ =NI ka** **TUTU<sup>m</sup>ZI<sup>m</sup>BANA**

どういう-INF-ATTR 年月日 =DAT Q 枕詞

「……『何年後の何月何日に(つつじ花のように)……』」

香君之 牛留鳥 名津匠来与  
**NIPOPÊR-U KÎMÎ =GA** **NIPO<sup>m</sup>DÖRI=NÖ** **na<sup>m</sup>dusap-î KÖ-M-U =tö**

照り輝く .STAT-ATTR あなた=NOM/ACT 枕詞 水に浸かる-INF 来る-INF-ATTR =COM

「……綺麗なあなたさまが(にお鳥のように)浅瀬を歩いて来るだろうか』と……」

立居而 待監人者 王之  
**TAT-I-TE WI-te** **MAT-I-kêm-u PÎTÖ pa** **OPOKÎMÎ=nö**

立つ-INF-SEQ 座る-SEQ 待つ-INF-PST.INFR-ATTR 人 TOP 天皇=GEN

「……立ったり座ったりして待っていたら、当のその人は、——天皇の……」

命恐 押光 難波國爾

**MĪKŌTŌ KASIKŌM-Ī**                      **OSITERU**                      **nanipaNŌKUNI =ni**  
 勅語 承る-INF                      枕詞                      難波国 =DAT  
 「……勅語にしたがって、(おしてる) 難波の国に……」

荒玉之                      年經左右二                      白栲  
**ARATAMA=nö**                      **TŌSI P-URU ma<sup>n</sup>de =ni**                      **SIRŌTAPĒ=NŌ**  
 枕詞                      年 経つ-ATTR LMT =INF                      枕詞  
 「……(あらたまの) 一年が過ぎるまで (しろたえの)……」

衣不干                      朝夕                      在鶴公者  
**KŌRŌMO MO POSA<sup>n</sup>ZU**                      **ASAYŌPĪ =NI**                      **ARI-t-uru KĪMĪ pa**  
 衣 CNG 干す.NEG                      朝夕 =DAT                      生きる-PFV-ATTR あなた TOP  
 「……衣も干さず、朝早くから夕遅くまでもいたあなたさまは——……」

何方爾                      念座可                      薨蟬乃  
**IKASAMA n-i**                      **OMOP-Ī-MAS-E ka**                      **utuSEMĪ=nö**  
 どんな COP-CVB                      思う-INF-HON-CSL Q                      枕詞  
 「……どのように思い詰めてか、(うつせみの)……」

惜此世乎                      露霜                      置而往監  
**WOSI-KĪ KŌ=NŌ YŌ =wo**                      **TUYUSIMO=NŌ**                      **OK-Ī-te IN-I-kēm-u**  
 惜しい-ATTR PROX=GEN 人生 =ACC 枕詞 降りる-INF-SEQ 去る-INF-PST.INFR-ATTR  
 「……惜しい人生を(露霜のように)始め、(露霜の消えるように)捨てたのだろう……」

時爾不在之天  
**TŌKĪ ni ARA<sup>n</sup>ZU-site**  
 時 COP-INF ある.NEG-SEQ  
 「……死ぬべき時ではないのに……」

不明なよみを推定する方法のひとつは、前後の文脈をみることである<sup>3</sup>。よみが不明な〈牛留鳥〉に後続する〈名津匝〉を **NA<sup>n</sup>DUSAPĪ** とよむことに疑義の余地がないことは諸家一致する。この動詞 **na<sup>n</sup>dusap-** は鳥類の動作を表現することが通例なので(注釋)、〈鳥〉字を末尾にふくむ〈牛留鳥〉が鳥類の名であった蓋然性は極めて大きい。これを鳥の名とみるの

<sup>3</sup> 確例を小文字で表記する慣習が簡便なので、本稿は、上代中央方言をラテン文字で表記する。そのさい、要旨の Frellesvig—Whitman 式とはことなり、本文においては Mathias—Miller 方式に前鼻音を書き入れたものを採用する。イタリック体はいっさい使用しない。

は、通説といってよい。

この蓋然性の大きさ、あるいは通説を信頼し、いまかりに、〈牛留鳥〉がなにがしかの鳥類をさしたことを真であると仮定してみよう。つぎの考察の課題は、この〈牛留鳥〉が、どんな鳥の名であったかの特定である。

可能な選択肢が相対的に精密に予測できることから、ここでは第一に、〈牛留鳥〉を、音仮名としてよむことが可能かを検討する。さて、〈牛留〉を通常の一音一音の音仮名としてよんで<sup>4</sup>、「黒鳥」であるとする説(大系、ONCOJ)がある。しかし、これは棄却すべきである。〈牛〉の音仮名としての用例が上代文献<sup>5</sup>に皆無であるらしいこと(澤瀉ほか 1967: 902)は、音仮名としてよむたちばを危殆に瀕せしめるに十分である。かりに、大系の *kurōTÖRI=NÖ* とのよみをとった場合には、〈牛〉を *ku* とよむ忌避すべき蛮勇のみならず、さらに〈留〉を *rö* としてよむ、万葉集には用例のない用字(注釋)を仮定しなければならない。消去法的に、この文字列はなんらかの訓を利用したよみがなされたと推定することをえらぶのがおだやかとなる。

## 1.2. 〈牛留鳥〉は「正訓」的である

さて、1.1.節での議論から、〈牛留鳥〉が訓を利用したよみがされた蓋然性が大きいことはわかった。ひとくちに訓といっても、さまざまな可能性があるので、仮説を人力で発見するためには、徐々に、よまれた確率の小さいよみを除外してゆく必要がある。

確率の小さいよみを除外するとき、そのよみが当時の書記体系と調和し、*ad hoc* なものでないことは重要である。万葉歌人にも、自らのつかった万葉仮名表記がいかほど一般的か、あるいは、いかほど特殊かについての意識(用字意識、正書法意識)がすくなからずあったとされる(cf. 犬飼 2005[1978], 沖森 2009: 77)。この〈牛留鳥〉は、そのいみで、そのころ一般的な表記、つまり、「義訓」ではなく「正訓」的な表記であったみこみの方が、大きい。これは、巻11・2743 或本にも、〈留牛鳥〉との、「牛」字と「留」字が逆転したのみの文字列がみとめられ、本稿でこれから説明する通り、両者におなじよみを推定する仮説が可能である蓋然性が大きいことによる(cf. 全集、新編全集など)。仮説発見の基本的な思考法にもとづけば、この訓の用字意識が、「義訓」よりも「正訓」にちかかった可能性がある以上、巻3・443 〈牛留鳥〉と、巻11・2743 〈留牛鳥〉とを相互に観照してよみを推定するのが、順当となる。

以上のごとく、書記体系における *ad hoc* さを問題としたとき、いくつかの仮説は力を減ずる。具体的には、牛を留める道具「†押(をし)」のあったことを想定して「シナガド<sub>レ</sub>リ」(注釋) *WOSI=DÖRI=NÖ* (講談社、中西 1995: 63) などとよむ説などは、正訓の可能性が存在

<sup>4</sup> 本稿において、動詞「よむ」はあらゆる種類の「よみかた」をさす。換言すれば、なんら重要な学術的意味を区別しない。

<sup>5</sup> わたくしの不明から、「牛」の出土文字資料の使用状況は十分に把握できなかった。2022年5月29日に木簡庫を閲覧したところ、音仮名としての用例はなかった。

することを説明しようとしないので、相対的に説明力をかき、なべて蓋然性を減ずる。

進行上、ここでさらに徴証を提示して、行論をすすめる前に、前掲のふたつの対立仮説をあらかじめ棄却しておきたい：

- 提案者じしんも瑕疵を自覚する SINA<sup>a</sup>GA<sup>a</sup>DÖRI 説を、われわれは何故棄却すべきなのかの詳細は、1.3.節の「傍証」についての記述を参照されたい。
- WOSI<sup>a</sup>DÖRI=NÖ 説の前提する語「押(をし)」は、おそらく文献に用例がない。たしかに、『日本方言大辞典』「おし【押】」項の「(2) 鳥獣を捕る仕掛け」をもとに、斯様なことばの存在を想定しうる。しかし、現代日本語方言<sup>6</sup>から語頭音節が「ヲ」であった証拠が提供されることは、(かりそめにも目下の通説では) ありえない以上、語頭音節を「ヲ」と推定するのは *ad hoc* で、さげねばならない<sup>7</sup>。さらに、これを説明するよりほかに発見の明証のみいだされない、「牛を留める道具」が「鳥獣を捕るしかけ」に意味変化したとする仮説までが要請され、このよみが立脚する仮説は冗長である。

### 1.3. 〈牛留鳥〉を枕詞「ニホド<sub>乙</sub>リノ<sub>乙</sub>」とすることで頭韻をえる

文脈からして、〈牛留鳥〉が後続する動詞 *na<sup>a</sup>dusap-* の枕詞でもあった可能性は無視すべきでない。文脈的には、この位置に鳥類の名が生じるのなら、十中八九枕詞でなければならぬかと直観され、むしろ、第一に検討すべきである。上代文献中において *na<sup>a</sup>dusap-* にかかり、かつ、鳥類名をふくむと認定しうる枕詞には NIPO<sup>a</sup>DÖRI=NÖ (巻 11・2492 〈丹穂鳥足沾來〉、巻 12・2497 〈尔保鳥之奈津柴比来乎〉、巻 15・3627 〈柔保等里能奈豆左比由気婆〉) のみがしられる。「鳩鳥(ニホド<sub>乙</sub>リ)」あるいは「鳩(ニホ<sub>(甲)</sub>/ミホ<sub>(甲)</sub>)」とは、カイツブリ (*Podiceps ruficollis*) の古名である。〈牛留鳥〉を NIPO<sup>a</sup>DÖRI=NÖ とよむ説は、最もよく支持される(釋注、鶴・森山 1972、集成、全注、全集、新編全集、井出・毛利 2008、新体系、岩波文庫、全歌講義)。

この説の傍証には、1.2.節において蓋然性が大きく減じたことがあからさまになった SINA<sup>a</sup>GA<sup>a</sup>DÖRI 説の視点を追加することができる。この SINA<sup>a</sup>GA<sup>a</sup>DÖRI 説本体は、非常に肯んじがたい。相互観照性の欠如のほか——提唱者じしんがみとめるが——鳥類は鳥類でも、この鳥とする根拠がまったくといってよいほどない。この語は、直前の五・七句にある〈茵花〉 TUTU<sup>a</sup>ZI<sup>m</sup>BANA との視覚的対称性のみから提唱されたものだからである。しかれども、SINA<sup>a</sup>GA<sup>a</sup>DÖRI 説の出発点である、隣接句との対句、ひいては頭韻のごとき修辭の連関をみいだす視点は、訓の推定にとって——重視するものではないが——無視しがた

---

<sup>6</sup>わたくしが所謂「日本語」に *wo/o* の別が保存されないといったときは、当然、琉球諸語をふくまない。

<sup>7</sup> ついては、この俚言「オシ」にたいしては中央方言の動詞「押(お)す」との同源性をさぐる仮説がこれよりすぐれる。

い。SINA<sup>3</sup>GA<sup>3</sup>DÖRI 説の視点をとり、直前の句 NIPOPÊRU KÎMÎ=NÖ との頭韻を踏む意図があったものと推定して、よみを NIPO<sup>3</sup>DÖRI=NÖ と推測するのも、単独の根拠には十分でないが、傍証となるに相違ない。

#### 1.4. 〈牛留鳥〉と〈留牛鳥浦〉の相互観照

傍証は、頭韻にとどまらない。1.2節にのべた通り、文字列〈牛留/留牛〉は「正訓」的な訓を有した可能性があるから、巻11・2743或本〈留牛鳥浦〉との相互観照が、もっとも基礎的な傍証をもたらさう。

〈留牛鳥浦〉のよみについての議論に入るよりさきに、この校訂を確認しておく必要がある。この校訂の当否については1.1.—1.3節の議論において前提としたが、ここであらためてふれる。校訂したいは本稿の論旨に直截に関係せず、また、遺憾ながらわたくしの力倆を超過するので、諸本の異同の揭示は省略し、諸家の校訂のみを論題にする。巻11・2743或本のこの文字列は、〈留牛鳥浦〉ではなく、〈留牛馬浦〉とする校訂(集成、講談社、中西1995、全歌講義)、あるいはつとに(森本1984[1932]、私注)採用された〈留鳥浦〉とする校訂(全注)が近年でも採用されることがある。うち、〈留鳥浦〉は非仙覚系統本の全体にわたる文字の出現を仮定することになる(注釋)ので、もっともらしくなく、もはやとらぬ方がよい(cf. 全歌講義)。遺憾ながらわたくしは、広瀬本以外の非仙覚系統本の詳細な系統関係に関する仮説に関連する議論をみつけることができなかつた<sup>8</sup>ので、系統樹から演繹して変化の発生した本を推定することはできず、どちらの見解をとるのがのぞましいかをヒューリスティックにたよって判断するしかない。数をとる最大節約法的なヒューリスティックスでは、嘉暦伝承本のみによる〈留牛馬浦〉よりも、類聚古集・古葉略類聚鈔・広瀬本などによる〈鳥〉をふくんだ〈留牛鳥浦〉の校訂をとることは、のぞましくみえる。それでも、〈馬〉から〈鳥〉への変化が並行的に生じる確率が大きければ、数をとるヒューリスティックスは無効である。しかしながら、みあやまりによる変化の確率をとるベイズ法的なヒューリスティックスからは、〈留牛馬〉から〈留牛鳥〉や〈留鳥〉への変化は、おなじ熟語「牛馬」の存在する〈留牛鳥〉から〈留牛馬〉への変化よりもみあやまりの確率が小さく、何回も並行して生ずることは想定しにくいと予測される。類聚古集・古葉略類聚鈔・広瀬本をはじめとした、嘉暦伝承本以外のかなり多くの写本が単系統ないしそれにちかい状況にある、とするたちばをとるのなら、みあやまりのヒューリスティックスは無効になるが、各本の伝承状況からみて、想定しがたいに相違ない。かれば、ここにのべたヒューリスティックスによる推定を前件にすると、——いかにあがいても、前件否定の誤謬を犯さざるをえないことは遺憾であるが——〈留牛鳥〉との校訂がよりのぞましいとのたちばは、より合理的なたちばと判

---

<sup>8</sup> 例をあげれば、伊藤博ほか『萬葉集事典』(有精堂出版)の系統樹は詳細でなく、ここで採用したヒューリスティックスとまったく差異のない推論を展開するよりほかない。

断されるはずである<sup>9</sup>。

NIPO=NÖ URA 説にはほかの説にないすぐれた点がある。文字列〈留牛鳥〉は、1.3.節で論じた通り NIPO=DÖRI=NÖ とよんだものであると推定される。これをアブダクションして、巻11・2743 或本〈留牛鳥浦〉を NIPO=NÖ URA とよむことを、ここで、かりに真であるとする。すると、巻11・2743 本文の対応箇所にある〈比良之浦〉pîra=NÖ URA(琵琶湖附近の地名)と或本との間にある地理的な異同をなからしめ、かつ、琵琶湖を「ニホノウミ」と称呼した中古の用例との通時的連続性が仮説のもっともらしさを大きくする。

一方で、より不審な校訂〈留牛馬浦〉は、NIPO=NÖ URA 説よりも劣る。この不審な校訂をとり、「牛馬を留める」のは「縄・綱」であることから、NAPA=NÖ URA あるいは TUNÔ=NÖ URA(私注:236)とよむ説は、肯定の不審さのほか、或本との間にある地理的な相違について説明することもできない。この説明力のひくさは、棄却の必要性が潜在的に大きい。近年ほとんど支持されない TUNÔ=NÖ URA 説(私注)には、地理的問題に負荷すべきさらなる問題点がある。TUNÔ=NÖ URA とよむ説は、巻3・279〈角松原〉と同一視することができるが、上代人が「綱」を tunô と称した例は僅かに枕詞 taku<sup>a</sup>dunô=nö(『万葉集』巻20・4408〈多久頭努能〉)に化石的にみえるのみであり、かつ、この異形態をとるべき積極的理由(戯れの可能性など)は目下みあたらない。文字列〈留牛/牛留〉との相互観照が提供するより大きな説明力もかんがみれば、tunô 説はあきらかに棄却にたる。不審な校訂〈留牛馬浦〉の方のよみには、のこる NAPA=NÖ URA(佐々木1927、私注、大系、釋注、鶴・森山1972、集成、講談社、中西1995、全歌講義)がひろく支持される。この仮説は、巻3・354〈縄乃浦尔〉と巻3・357〈縄浦従〉に同一視して、兵庫県相生市那波(なば)に比定する(大系)ものである。しかしこれらの地名を相生市那波に比定するのなら、その際には、古代から現代の間にあった不規則な濁音化を論証しなければならない。「ナハ」は、南西諸島から関東付近までに分布する海岸地名とされ(鏡味:109—110)、かつ、万葉集のほかのぶぶんに attested であるから、このよみをもつ地名の存在はもっともらしい。しかし、古代から現代までに濁音化が生じた理由がいまだ闡明されてこない。「魚(ナ)<sup>10</sup>-場」や「波(ナ)<sup>11</sup>-場」の様に、後部を「場」と再解釈したことによるのかもしれないが、この仮説の検証はさらに調査を要するに相違ない<sup>12</sup>。校訂における相互観照の欠如、地理的相違のほか、音変化についても仮定の上に仮定をかさねることになる点からすれば、この説は、現時点では検討から除外するに

---

<sup>9</sup> 問題が生じるかもしれないので附記すると、この校訂の検討過程にやや近い内容は竹生・西(2010a)ですすでに行論せられた。

<sup>10</sup> 形態素「魚(ナ)」は、「赤魚(アカナ)」「魚群(ナブラ)」(日本方言大辞典)などにみられる。

<sup>11</sup> 形態素「波(ナ)」は、上代語「波折(ナフリ)」(澤瀉ほか1967:538)などにみられる。

<sup>12</sup> 日国によれば、形態素「場」は13世紀ごろにみえはじめる。日本歴史地名体系の引用する文献のうち、第二音節が濁音と確定できる最古の資料は慶長国絵図であり矛盾はないが、当然この主張には諸文献の精査を要する。

たる。

### 1.5. 〈牛留鳥/留牛鳥〉は牛言葉なのか？

〈牛留鳥〉がなぜ NIPO<sup>o</sup>DÖRI=NÖ とよめるのかを説明するときは、つとに主張された誤写説でなく、牛言葉説が有力である。巻3・443 〈牛留鳥〉を NIPO<sup>o</sup>DÖRI=NÖ と推定する見解は、ふるく国学の時代からあった。しかし、この時点での説(荒木田久老『万葉考槻乃落葉』)は当該部分が〈尔富〉の誤写なることを主張するものであって、過度に恣意的で、積極的にとるべきでない。時代は大きくくだと、1971年に全集においてはじめて、現代方言の「止まれ」を意味する牛言葉「ボウボウ」(以降、《ぼーぼー》と表記する)との関連を示唆してこれを NIPO<sup>o</sup>DÖRI=NÖ とよむ理由を説明する説がのせられるにいたった、とわたくしは認識する<sup>13</sup>。この牛言葉《ぼーぼー》の同根語の分布地(の概略)と意味について、『日本方言大辞典』「ぼー」〔感動詞〕(2)・(3)によってしめすと、(2)になる。

#### (2)

(2) 牛を使う時の掛け声。

(ア) 止まれと命ずる掛け声。新潟県上越/岡山県邑久郡/香川県

《ぼ》《ぼぼ》香川県

《ぼーぼー》新潟県佐渡/静岡県/三重県志摩郡/兵庫県赤穂郡/愛媛県周桑郡

(イ) 前進を命ずる掛け声。

《ぼーぼー》静岡県磐田郡

(ウ) 後退を命ずる掛け声。

《ぼーぼ》新潟県佐渡

(エ) 右へ行けと命ずる掛け声。山口県見島

(オ) 食べろと命ずる掛け声。

《ぼーぼー》新潟県佐渡

(3) 牛を呼ぶ声。

《ぼーぼー》静岡県/沖縄県波照間島

《ぼーや》静岡県小笠郡

《ぼーやぼー》沖縄県波照間島

牛言葉「ニホ」が《ぼーぼー》に変化することは、おそらく可能である。全集が想定した音変化 \*nipo > /bo:/ の語頭子音は、散発的とみられる母音脱落の結果生じた「連声濁」の一種として説明することができる。第二音節が長母音となることは、各方言が経験した最小

---

<sup>13</sup> 遺憾ながら、わたくしの眼界ははなはだしく狭く、牛言葉説がはじめて提出された場所が全歌講義の語調の通り全集であるのかを検証できない。

語制約や代償延長などが原因として想像されるが、こちらは将来の論証を要する。しかし、何れにせよ、《ぼーぼー》との同根説が現在の日本語歴史音韻論が不可測な範囲にむかって大きく外れることはないのである。《ぼーぼー》を上代中央方言の \*nipo (の同根語) の子孫と推定し、——おそらく \*nipa > /-ba/ [ᵐba > ba] 「場」に起きた変化に関する語彙拡散によって——、ある時代に変化したものであるとするこの仮説は、——現代方言の研究者には音変化の整備と本仮説の検証が不可避に要請されるけれども——あるていど信頼することができたはずである。

しかしながら、1994 年の新編全集では、この《ぼーぼー》との同源性を指摘する記述は削除され、ただ牛言葉である可能性をほのめかすのみとなってしまった。削除の事情についてわたくしはしることができなかったが、かりに本仮説の検証が実行されずに削除されたのであれば、端的に比較言語学的手法からの後退、あるいはある見地からすれば、方言学と文献学との交流の衰退であって、残念至極である。

しかしながら、《ぼーぼー》についての記述の削除には、くむべき点がある。語彙拡散——散発的に生じた音変化が、心的な語形のつながりによってひろがってゆく現象——を仮説のなかに設けることは、上野善道氏<sup>14</sup>がつとにのべた通り、乱用すれば、「歯止めがなくなって何でも説明」(上野 2006: 34) する状態にいたる陥穽とつねにとり合せである。また、第二音節の長母音化についても論証が必要なのはあきらかである。非科学をきょくりよくさけようとしたのなら、この削除には一定の諒解の余地がある。ここで本稿も、新編全集が《ぼーぼー》の記述を削除したさいにしたがったと解釈される方針にコミットし、《ぼーぼー》との同根説を一旦棄却しよう。「音韻分化条件がみつからない以上」(上野 Ibid.)、既存の規則変化の体系のうち側で、この〈牛留鳥〉のなぞを説明することをこころみるのである。

以上の事情にしたがって、本稿はここに牛言葉説を一旦棄却し、次節以降、新巧の方向性を模索する。かくして〈牛留鳥〉を「ニホド<sub>レ</sub>リノ<sub>レ</sub>」とよむ根拠にめぐまれてこなかったのみかた (全歌講義) は事実であると確認される。

## 2. 『万葉集』中央方言部分の借訓にふくまれる才段連体形

### 2.1. 才段連体形の定義

牛言葉説にたよらない NIPO<sup>ᵐ</sup>DÖRI=NÖ 説には、近年の日琉諸語の比較歴史研究の成果である、中高母音の上昇 (Mid Vowel Raising) が、重要なやくめをはたす。本項は、この概念を導入する。\*suNkos-「過ごす」、\*keNsu「傷」などに再建される日琉祖語の \*o, \*e は、いまだ闡明されない条件にしたがって、そのいちぶが上代中央方言で、それぞれ、su<sup>ᵐ</sup>gus- (『万

---

<sup>14</sup> 本稿において、存命人物には区別なく敬称「氏」をつける。

葉集』巻 20・4318〈須具之〉)、kî<sup>o</sup>zu(『新訳華嚴經音義私記』〈咎辱<sup>上訓岐受</sup>〉)、澤瀉ほか 1967: 241) の様に、ウ段とイ段甲類相当に変化した (Pellard forthcoming, ホイットマン 2016, 五十嵐 2021, 平子 2021, Vovin 2020, Miyake 2003)。この音変化が中高母音の上昇である。古典日本語の「連体形」もまた、この中高母音の上昇を経験した形態素のひとつである。

古典日本語の「連体形」に相当する形態素は、上代東国・八丈・青ヶ島および琉球祖語の反映形が日琉祖語の \*o にさかのぼるものであることから、日琉祖語に \*-o として再建される (Pellard 2008, 五十嵐 2021: 23)。本稿は以降、この日琉祖語の「連体形」相当物 \*-o が、日琉祖語で \*u であったものとのくべつがつく反映形をしめすとき、その反映形を「**オ段連体形**」と称することにする。

このほか出土文字資料においては、上代中央方言の分布地域から出土した資料中にもオ段連体形が文証されることがしられる (Osterkamp 2017)。

## 2.2. 「牛を留める」ことは上代人に荷物運搬を連想させた

上代、牛や車は貴重であったが、中古と同じく、荷物を搭載した車を牛に牽引させる習慣があった (櫻井 2012: 6, 8, 193; 朝野 1997) し、おそらく馬とおなじく駄載もあった (平野 1991, 朝野 1997: 25)。竹生・西 (2010a) はこの事実に注目し、(3) の興味ぶかい仮説を提案した。

(3) 「牛を留める」ことは、牛への駄載＝「荷負フ」ことを連想させた。

(3) を検証するさい、第一に、牛の駄載は、動詞「負フ」によって表現されえたのかが問題になる。上代中央方言の動詞 op- (『万葉集』巻 5・905〈於比豆〉) は、人が背に負ったことを意味した用例と (澤瀉 1967: 155、前掲用例)、動物が動作主になった用例はあるが (『古事記』歌謡 38〈淤波受波〉)、動物が背に荷物を負ったことを意味する用例はおそらくない。わたくしがしるかぎり、とくに動物が背に荷を負ったことの意味を担ったとみられる動詞もない<sup>15</sup>ので、しかしがに、中古以降とおなじく<sup>16</sup>動物にも op- が使用されたと推定して問題はない。この訓は、ある種の戯れや共通知識の存否じたいを問題としはじめないかぎり、存在を想定することじたいに問題はなく、この戯れや共通知識が存在した可能性が無視できない時点で、検討に十分である。

---

<sup>15</sup> 「荷」を「負フ」といったとき現代日本語「標準」語の話者として容易に想起される古代語「ニナフ」は、『日国』および澤瀉 (1967: 545) による通り上代文献において肩に「かつぐ」ことをさすため、この場面に適すまい。

<sup>16</sup> わたくしのせまい眼界のかぎり、中古に「荷」を「負フ」といった例は新編全集の日本霊異記の訓のみがみつかった。ただし、中世・近世には用例が多い。ほか、中古の仮名文献にうつほ物語「蘇枋の馬に**負ほせて**、同じ男に引かせたり」があるが、これも「荷」を「負フ」コロケーションの存在を示唆しよう。

竹生・西 (2010a) は、(3) の重要な視点を提供する報告であるが、一方で、「荷負フ」を NIPO とよむ徴証に、nipop-「匂フ」が古い \*ni-op-「丹-負フ」に由来することに起因する語源意識の存在を主張する (竹生・西 2010b) ことは、棄却すべきである。

竹生・西両氏のかかげる語源意識説の「第一の根拠」(Ibid.: 51) である、「馬」と「匂フ」の共起した例は偶然である可能性があり、傍証としては重要であっても、確拠として重視すべきではない。

「第二の根拠」(Ibid.) である上代文献における訓仮名の諸例は、すべて規則的な母音脱落 (cf. 2.3 節 (5) および引用文献) と用字意識によって説明できる。

音変化 \*op > pop は、「第三の根拠」(Ibid.: 53) において、動詞 op- をふくむ語にのみ想定される。しかしもともと、/p/ は、「春雨 (ハルサメ<sub>レ</sub>)」(『万葉集』巻 18・4138 (波流佐米)) 「糲米 (クマシネ)」における /s/ の様な——すくなくとも共時的な——挿入子音として報告されない。斯様な類音素は、Martin (1987) の \*z の様な、語頭で消失し、語中で保存された祖音素を設けて説明すべきでないし、また、類似した環境を有する語がこの変化をまぬかれたのが確実であるのだから、通言語的にややまれな子音強化をとまった語中音挿入として説明することはさけるべきである。語中音挿入をむりやりに仮定するのは ad hoc となる。1.5.節のことはをくり返すが、語彙拡散は、乱用すれば、「歯止めがなくなって何でも説明」(上野 2006: 34) する非科学にとり合せであり、この種の ad hoc な仮定のみによるのはやむをえぬときをのぞいてさげなければならないと、わたくしは信ずる。

かるが故に、竹生・西 (2010a) の語源による説明は、棄却すべきである。しかし私見では、下掲の案に修正するとき、この仮説の根幹の着想は可能である：

#### (4) 修正案

- ① 「牛を留める」意味の表記〈留牛〉が、「荷負ホ<sub>甲</sub>」様子を連想させたため、\*nipô (< \*ni əpo 「荷負ホ<sub>甲</sub>」) とよむ習慣が存在した。
- ② 〈留牛鳥〉表記は、ほんらい、① がふくむオ段連体形のもつ俗語的な語感を表現に利用するための借訓である。

① については 2.3.節で、②については 2.4.節および 3 節で論証する。

### 2.3.当該表記習慣の成立可能性

〈留牛鳥/牛留鳥〉が牛車への荷物の搭載、つまり、「荷負フ」ことを連想させたのなら、オ段連体形 (日琉祖語の「連体形」相当物 \*-o が、日琉祖語で \*u であったものとのくべつがつく反映形をしめすもの。詳細は 2.1.節参照) をする話者がよむと後続する「鳥」や「浦」を修飾し「荷負ホ」に語形変化してよまれえたはずである。「荷負ホ<sub>甲</sub>」は、韻文中であることも相俟ったはずで、母音脱落の背景から「ニホ」とよまれることが、ごくしぜんに可能であった。

上代中央方言には、(5) の通時的な母音脱落の規則が存在し、「荷負ホ」の母音脱落は、これによれば完全に予測の範囲内である<sup>17</sup>。

(5) \*i > ∅ /# {n, m, (my)} \_\_ə

語例：

- \*ni-əpəp- = nipop- (『万葉集』 卷 10・2115 〈丹覆〉) 「照り映える」
- \*mi-əpə = mîpō (『古事記』 上 〈出雲之御大之御前〉) 「(地名) ミホノミサキ」
- \*ni-əpə-ye = nipoye- (『万葉集』 卷 13・3309 〈尔太遥〉) 「照り映える」
- \*myə-uNsi > \*ni<sup>z</sup>i > にじ「虹」

附言すれば、先上代中央方言の「荷」はより古い \*nəy に由来し (Martin 1987: 496)<sup>18</sup>、キ・ヒ・ミおよびその濁音であれば乙類に反映する祖音素を有する。私説によれば、かりに音節「ニ」にかつて甲乙が存在したのであれば、\*ni-əpə = nipō 「荷負ホ<sub>甲</sub>」の成立が合流以降であると推定される。これは、この訓がどんなにさかのぼっても 8 世紀初頭ていどのもので、非現実的なほどふるい時代にさかのぼらないことを示唆する。

#### 2.4. 当該借訓の成立可能性

ある別の語をしめすために、ほかの語を表記する漢字に定着したよみをかりて表記するものを、本稿は借訓と称する。本来は語「荷負ホ<sub>甲</sub>」を表したはずの文字列〈牛留/留牛〉を借りてきて語「鳩 (ニホ<sub>甲</sub>)」とよませたと主張する私説も、借訓の存在を前提とする。借訓は、1.2. 節でのべた様なあるていど確立した表記習慣が存在しなければ、よめるものとして成立することが難しい。したがって、万葉人の間に、文字列〈牛留/留牛〉が、コロケーション「荷負ホ<sub>甲</sub>」を連想させる慣習が存在したことを示唆、あるいは摘示する必要がある。しかし、結論をのべれば、この慣習は確証できない。この原因はおそらくは、訓字主体表記が出現した (文証は犬飼 2008: 128 の引用するところによれば、730 年の例が最古) のとほとんど同時期に才段連体形が消滅してしまったため、十分な文証がのこるだけの期間才段連体形を利用する表記が使用されなかったことである。この慣習が当時存在したことを暗示する傍証をふたつ指摘することはできるが、このどちらも、これを確信せしめるに十分でない：

---

<sup>17</sup> 母音脱落を音法則とみるアイデアは、わたくしが 2021 年に私家版で公開した文書にてすでに詳細を論じた。当該論文は大幅に改稿しなければ発表できない状況にあるため、目下、別稿を準備中であるが、柳田 (2003) を筆頭に、山口 (1985 [1971])、毛利 (1991, 1992, 1999)、佐野 (2004) といったその他の先行研究を参照することによっても似た体系をすることができるともかもしれない。

<sup>18</sup> 『万葉集』 卷 1・23 〈射等籠荷四間〉とそれに対比される同卷 1・24 の〈伊良虞能鳩〉における被覆形「荷 (ノ<sub>乙</sub>)」による。

- 傍証の第一は、2.2.節にて既述の牛の駄載による荷物運搬の習慣である。
- 傍証の第二は、音節「ホ」の上代特殊仮名遣の一致である。「ホ」の上代特殊仮名遣が『古事記』歌謡 (犬飼 2005 [1989]) や『日本書紀』歌謡 β 群(Miyake 2003 [Bentley 1997 子引き])で区別されたことは、目下、あるていど支持される (Vovin 2020)。犬飼 (2005[1989]) のしめした通り、「鳩」の「ホ」は、甲類である (『古事記』歌謡 38 〈迓本杼理〉)。オ段連体形は、その日琉祖語形 \*-o の規則的反映形をとっても、出土文字資料における〈児〉=kô (石橋ほか 2003: 121) や〈古〉=kô(奈良文化財研究所 2001: 11, #37) などの使用からみても、上代中央方言でオ段甲類に反映されたはずであるから、「負ホ」のホと「鳩」のホは、どちらもホ甲類であったとみなせる。文字列〈留牛鳥〉〈牛留鳥〉が、8世紀初頭以前に遡りうる特徴であるオ段連体形を有することと矛盾しない。ただし、万葉集には、いっしゅの文字遊戯のためにオ段甲乙を無視した例が存在しうることをみれば (犬飼:2005[1978] 167)、傍証として信頼に足らないかもしれない。

### 3.オ段連体形の「位相」

#### 3.1.オ段連体形は俗語である

2.1.節でこの問題にすこしふでをふれたが、オ段連体形は、上代中央方言の出土文字資料にも観察されることが指摘される (Osterkamp 2017)。わたくしのせまい眼界のかぎり、これまで発見されたオ段連体形がみられる木簡は二枚である。(6) にしめす7世紀後半の堆積土から出土した木簡における〈佐児〉「<sup>サ</sup>咲コ甲」のほか、3.3.節の (8) にしめす奈良時代初期 (8世紀初頭) に開鑿され、末期には埋没の状態にあった溝から出土した例がしられる (奈良文化財研究所 2001: 11, #37)。

- (6) □<sup>[児カ]</sup>矢己乃者奈夫由己□□<sup>[利]</sup>伊真者々留部止 (石橋ほか 2003: 121)
- |              |            |               |                   |
|--------------|------------|---------------|-------------------|
| sa[k-ô] ya   | kô=nô pana | puyukômô[r-i] | ima pa parupê =tö |
| 咲く-ATTR INTJ | 木=GEN 花    | 枕詞            | 今 TOP 春先 =COM     |
- 「[咲]くのは梅の花。(冬籠もり)、今は春だといって...」

オ段連体形は、東国方言話者の作歌を除けば、上代中央方言にみられないとされてきたが、木簡にはみられる。これは、なぜか。この理由は、中高母音の上昇は中央方言のなかでたかい威信をもった変種が有した特徴であったこと、換言すれば、記紀歌謡や万葉集からよみとれるのは「歌語」のみであることであると、わたくしは想察する。けだし、オ段連体形をはじめとした保守的な特徴、あるいは \*yu>i/\_# のごとき innovative な特徴は、インフォー

マルな使用域や社会方言（「位相」）に属するものとして、換言すれば「歌語」ではない「俗語」としていぜんとして奈良時代にも使用された。そのいちぶをわれわれは、出土文字資料や、中古以降の語彙——「過ぎす」「黄金（こがね）」（Pellard forthcoming）といった、いってみれば「先祖返り」——を通して発見する状況にあるのである。

オ段連体形の威信が相対的に低かったことの傍証は、さらにひとつ指摘することができる。平野（1991:16）は、『日本霊異記』と『今昔物語集』における事例から、牛は馬とはことなり、都市の住人・商人ではなく、在地の富裕な農民に所有される傾向にあると報告する。かりにこの傾向が上代にも存在したものであれば、牛を使役しない傾向にある都市部出身の歌人に、オ段連体形が役牛を使役する農民や牛飼童の属する社会階層の特徴として認識された結果、〈牛留〉/〈留牛〉がオ段連体形を反映することになった可能性がある。

### 3.2. 〈留牛鳥浦〉の意図的な使用

〈留牛鳥浦〉がみられる『万葉集』巻11・2743 或本歌は、巻11・12の原資料B部に由来し（新編全集8:535）、題詞をもたず、作者は未詳である。

〈留牛鳥浦〉歌には、オ段連体形の俗語的な語感（cf. 3.1節）を看取することができる。この歌のオ段連体形をふくむ文字列〈留牛鳥〉は、(7)にかかげる歌意からして、3.3節でこれからのべる巻3・443 番歌とは対照的に、オ段連体形の俗語的な印象による、漁師としての卑俗な生活のばを表現することを目的に、意図的に選択されたとみる事が可能である。

(7) 中と二	君二不戀波	留牛鳥浦之
NAKANAKA n-i	KĪMĪ =ni KŌPĪ=ZU-pa	NIPONŌURA=nō
中途半端 COP-CVB	あなた =DAT 恋する.NEG-SUPP	ニオノウラ=GEN
「中途半端にあなたに恋するのなら、ニオノウラの…… <sup>19</sup> 」		

海部尔有益男	玉藻苺と
AMA n-i AR-AMASI wo	TAMAMO KAR-U~KAR-U
漁師 COP-CVB ある-CF INTJ	美しい藻 刈る-FIN ~刈る-FIN
「……漁師だったほうがよかったな。玉藻でも刈りながら」	

### 3.3. 忘れられつつある〈牛留鳥〉の意図

奈良時代初期（8世紀初頭）に開鑿され、末期には埋没の状態にあった溝から出土した例（奈良文化財研究所2001:11, #37）は、オ段連体形を含む最後の出土文字資料である。

しかし、この出土文字資料は、中央方言の分布域から出土こそしたが、中央方言の例として適当でないかもしれない。(8)にしめすこの出土文字資料は、前後の文脈から、3.1節の

<sup>19</sup> 訳文および訓は新編全集を参考にし、現代仮名遣を使用した。

(6) とおなじく難波津の歌の変種をしるしたとするのが通説である<sup>20</sup>が、Osterkamp (2017) が保存状態によって釈読が困難であるとのべた通り、読解が困難である。この読解の困難さは、私見によれば、非中央方言的な枕詞 *pui kösar-i* がみられることによる。したがって、中央方言におけるオ段連体形の保存を問題とすべき本稿においては、排除すべき例である可能性がある。これがかりに排除すべき例であるとするれば、『万葉集』巻3・443番歌と巻11・2743或本歌のみが、8世紀中央方言のオ段連体形の例とよびうることになる。

(8) <sup>〔夫〕</sup>伊己<sup>マフ</sup>冊利伊真役春部止作古矢己乃者奈 (奈良文化財研究所 2001:11, #37)

**[pu]i kösar-i ima ya parupê =tö sak-ô ya kö=nö pana**

(冬 入る-INF) 今 INTJ 春=COM 咲く-ATTR INTJ 木=GEN 花

「(冬が<sup>21</sup>終り<sup>22</sup>)今こそ<sup>23</sup>春だといって咲くのは梅の花」

オ段連体形の卑俗な語感は、巻3・443番歌には確認されない。3.1節および3.2節における仮説の相互観照からすれば、オ段連体形は、上代中央方言の話者に卑俗な語感を生じさせたとの仮説を発見できる。しかし一方で、本項が問題にする文字列〈牛留鳥〉(巻3・443番歌)には、その意図は看取しえないとみるべきである。巻3・443番歌は挽歌であり、しかも、〈牛留鳥〉は、(9)に引用する通り、死者の動作にかかる枕詞をかくための文字列である。わたくしのはなはだしくせまい眼界によるかぎりでは、上代中央方言話者の他界観(菊池1993, 白石2006)からみても、葬儀習慣(上野1993)からみても、死屍にむちうつ様な表現をすることは想定しづらい。

(9) 香君之	牛留鳥	名津匠来与
<b>NIPOP-ÊR-U KÎMÎ ⇒GA</b>	<b>NIPO<sup>o</sup>DÖRI=NÖ</b>	<b>na<sup>o</sup>dusap-i KÖ-M-U =tö</b>

<sup>20</sup> はなはだ不面目ながら、5月20日になるまで木簡庫に「関係研究論文一覧」が存在するのをしらず、しめきりの関係から詳細を調査できなかった (<https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/?c=literature&cr=6ACCNH18000104>)。

<sup>21</sup> *pui*「冬」は、現代近畿のいちぶにみられる \**yu > i / \_ #* が生じた変種の祖先と近縁なものかもしれない。このほか、類例はないが、主格=*i*をふくんだ基底形 \**puyu*(*)=i*の母音脱落形の可能性もある。

<sup>22</sup> *kö{s, z}ar-*は、静岡県で「入る」を意味した俚言「コサル」(日本方現代大辞典)の同根語 *kösar-*とよむと、「フイ」を主格として理解できるので、かりそめに採用した。「入る」と「籠モヅル」の關係に類似した意味拡張の例として、韓国語들어가다「(外から中に)入る」が、現象が「なくなる、消える」いみも有する(油谷ほか2018:572)ことがあげられる。しかし、中古にみえる否定辞の終止形の祖先で、「来(コヅ)ザリ」(小田2015:163)とも解釈しうるか。

<sup>23</sup> この変種の *ja* は、通常の難波津の歌の変種と対照すると、北琉球の主題助詞を想起させるが、Thorpe(1983:204)によれば\**ja*は非後舌非広母音のあとに生じる異形態であるから、中央方言の範疇で解釈すべきであると判断する。

照り輝く-STAT-ATTR あなた=NOM/ACT 枕詞 水に浸かる-INF 来る-INFR-ATTR =COM  
「……綺麗なあなたさまが(にお鳥のように)浅瀬を歩いて来るだろうか』と……」

巻3・443番歌のオ段連体形における如上の卑俗さの不在は、なに故に生じたのか。わたくしの貧弱な仮説発見の能力では、この歌が訓字主体表記にかきおこされた時点では、すでにオ段連体形をふくむ〈牛留鳥〉が、ほんらいの俗語的な語感がわすれられ、「鳩鳥」を意味する慣習的な借訓として使用されるのみの状態であったことによると、これを説明するよりほかない。オ段連体形の語感の忘却の理由はなにか。この忘却の理由には、ふたつの仮説が想像できる：

- 巻3・443番歌の原資料が巻11・2743番或本歌の原資料よりも新しい、もしくは、著者が老齢の話者であった。
- かりに巻3・443番歌の原資料が巻11・2743番或本歌の原資料よりも古いのなら、巻3の原資料の有した、より「宮廷に密着」(伊藤 1974a, b) した性格が、たんに宮廷に有縁なだけである巻11の原資料よりも、オ段連体形の語感をはやく忘れさせた。

しかしながら、わたくしには、以上のふたつの仮説のうち、どちらの仮説がすぐれるのかを較量することができない。現存万葉集に先行する「十五卷本万葉集」の原資料の成立の相対年代は、わたくしのはなはだしくせまい眼界のかぎり、未解明だからである(伊藤 1974b: 91, 村田 2021)。したがって、巻11と巻3の原資料のどちらがあたらしいのかをすることが、現時点ではできない。

しかし、オ段連体形の忘却された年代については、あらましをさだめることができる。巻16の一部までの成立が、おそらく744年直後である(伊藤 1974b: 83)ことは、すくなくとも744年ごろまでには、オ段連体形が忘却されつつあったことを明徴するのに十分である。巻3・443番歌も、巻11・2743番或本歌も、744年よりこのかたにはくだらない。訓字主体表記が発生したとき、須臾にしてオ段連体形の語感はわすれされたのである。

巻3・443番歌の語感の忘却には、さらに傍証がある。万葉仮名ではあるが、なにぶんにも「正訓」的表記の借訓であるとみるべきなので、〈留牛〉ではなく、〈牛留〉の様に客語を倒置するのもやや不可解であることも、語感の忘却を示唆しよう。1.5節にのべた通り、語彙拡散が言語変化のなかに観察されるのは不可避であるから、通説の主張する牛言葉「\*ニホ」の存在がこの表記の民間語源を惹起し、〈牛留鳥〉の倒置をあとおしたこともこの場合は考慮してよい。私見のもとでは、その仮定のみによつてこの文字列をよむ必要は、もはやないからのだから。

## 結論

これまでの行論を補閱し、今後の見通しを提供することで擱筆する。本稿は、『万葉集』3・443〈牛留鳥〉と巻11・2743 或本〈留牛鳥〉のよみについて、先行する仮説を検討し、これまで両者が「鳩鳥」を意味する文字列であったとみるべきことを確信せしめる説が提案されてこなかったことを確認した (cf. 1 節)。そののち、竹生・西 (2010a) が提案した仮説を修正し、下掲の仮説を提案した (cf. 2.2.節) :

- ① 万葉時代には、「牛を留める」意味の〈留牛〉が、語「荷負ホ<sub>甲</sub>」を連想させることによって、\*nipô (< \*ni əpo 「荷負ホ<sub>甲</sub>」) とよむ習慣が存在した (cf. 2.3.節)。
- ② 文字列〈留牛鳥〉は、ほんらい、① がふくむオ段連体形の「位相」のもつ俗語的な語感を表現に利用するための借訓であった (cf. 2.4.節, 3.節)。

この私説は、つぎのふたつの傍証からも示唆しうる (cf. 2 節) :

(ア) 役牛は馱載による荷物運搬の用途があったこと (cf. 2.2.節)。

(イ) 「鳩」と「荷負ホ<sub>甲</sub>」は8世紀初頭以前に存在した音節「ホ」の甲乙の一致を示すこと。

ただし、万葉集には、いっしゅの文字遊戯のためにオ段甲乙を無視した例が存在しうることをみれば (犬飼:2005[1978] 167)、傍証として信頼に足らないかもしれない (cf. 2.4.節)。

私説は、通説および竹生・西 (2010a) とはことなり、不規則な音変化 (nipo > <sup>m</sup>bo: または \*ni op->nipop-) を一切仮定せずにする。私説および竹生・西 (2010a) の ① が仮定する表記習慣は、しかし、存在の確証がいまだ発見できない (cf. 2.4.節)。

訓字主体表記の出土例が730年よりさきにはさかのぼらない (犬飼 2008: 128) ことからすれば、〈牛留〉〈留牛〉を「ニホ<sub>甲</sub>」とよむ習慣は、訓字主体表記の出現とほとんど同時におきたオ段連体形の喪失によって忘却される、短命なものであったと予測される (cf. 2.4.節)。けだし、十分な用例が文献に残されるだけの時間がなかったことにより、借訓に先行する表記習慣の存在がまったく看取できないのである。かかる想定によって、訓字主体表記の出現とオ段連体形の消失の絶対年代は、つぎの表にみるかたちで推定されると、本稿は主張してきた (cf. 3 節)。うち、(い) と (ろ) の前後関係は未決定である (cf. 3.3.節)。

本稿の主張する編年

7世紀後半	飛鳥藤原宮出土木簡	
729	巻3・443 番歌が詠まれる	
730	長登銅山跡出土木簡。このころ訓字主体表記成立か	

(い)前後関係不明	巻 11・2743 或本〈留牛鳥浦〉の原資料の成立	このころ平城宮出土木簡
(ろ)前後関係不明	巻 3・443 〈牛留鳥〉の原資料の成立 このころにはオ段連体形が消滅しはじめる	
744 直後	「十五卷本万葉集」成立	
8 世紀終る		

上の表に概括した通り、われわれは本稿を通してオ段連体形の終極をかいまみることはできても、凝望するにはいまだいたらない。しかしわたくしは、すくなくともオ段連体形の終極をみつめることのできるあらたな手法が発見されたことを、不遜ながら確信する。そのあらたな手法とは、旧来の発掘調査の注視ではなく、本稿のごとく、訓字主体表記にかくされたオ段連体形を、万葉集の形成過程とからめてさぐる手法である。さらには——むろん、analogical levelling の影響を容易に被りうる形態論的な現象であるオ段連体形を、ただちに中高母音の上昇の年代や、その他の語の「位相」と関連づけることは難しいことが予想されるが——このさき、中高母音の上昇以前の語形を**意識的に**使用して、われわれが難訓歌をこれまで以上に理解すること、また、難訓歌と相互観照的に祖形が再建されることなども、「あったらいいな」とひそかに憧憬してしまっている。

## 謝辞

本稿は、2020 年以前に SNS 上で発言した内容に端を発します。したがってはじめに、退屈な上、しばしばたいへん非学問的だったり無礼だったりするディスカッションにつきあってくれたふるい友人たちに（当時のわたくしの振舞は、回顧するたびにすこし死にたくくなります）、ふかく謝罪し、深謝のことばを申しあげます。

つづいて、すべてを網羅することはできませんが、本稿にすくなく関係したひとびとに、おなじく二通りのいみの深謝のことばを申しあげます。わたくしをあたたくみまもってくださった、親族をはじめとしたしんみつなひとびとと、研究部人文科学グループのアドバイザーのかたがたとに。2022 年 5 月 28 日に、72 時間で論証を修正しなければならないことにきづいてしまったときにはげましてくれた友人たちに。2022 年 5 月中旬以降、極めてよみにくかった草稿にコメントしてくださった研究部人文科学グループのアドバイザー、荒木さん、高井さん、森木さんに。2022 年 3 月に、研究部大発表会のスライドにあった論証の不備のごしてきをくださった敬愛する三人の友人、加茂さん、熊谷さん、K さんに。ともすれば、今後の、斯様な駄文をよませることになる読者のかたがたに。

本当に申し訳ございませんでした、そして、有難うございます、有難うございました。

2022 年 5 月 29 日

白鳥詩織

## 文献と略称

本稿は上代文献や言語変種の略称をきょくりよく使用しないことにした。

## グロス

本稿のグロスは全体として非常に稚拙であり、「なんちゃって」であるといつてよい。意味の決定は概ね小田 (2015) によるが、四段動詞連体形について論ずる行論の都合上、Vovin (2020) を参考にした場合がある。しかし Vovin (2020) の設ける形態素境界については、中古日本語の音調等を勘案し、註釈を設けずにあらためた部分がある。略称は「下地理則の研究室・方言グロスリスト」を参考に選択した。

ABL 奪格	CVB 副動詞	NOM 主格
ACT 活格	DAT 与格	PASS 受動
ACC 対格	FIN 終止 (終止形)	PROX 近称
ADD 添加	GEN 属格	PL 複数
ADV 副詞 (形容詞連用形)	HON 尊敬	PFV 完了
ATTR 限定 (連体形)	IMP 命令	SEQ 継起
CF 反実仮想	INC 起動	STAT 状態
COM 共格	INF 不定 (動詞連用形)	SUPP 仮定
CONT 継続	INFR 推量	TOP 主題
COP 繫辞	INTJ 感嘆	Q 疑問
CSL 確定条件	LMT 限界格	
CNG 全面的否定	NEG 否定	

## 参考資料略称 (五十音順)

本稿本文が引用した古代文献の原文は、断りのあるものをのぞきすべて新編全集の校訂である。

**岩波文庫** = 佐竹昭広, 山田英雄, 工藤力男, 大谷雅夫, 山崎福之 2015a 『原本 万葉集 上巻』岩波文庫, 佐竹昭広, 山田英雄, 工藤力男, 大谷雅夫, 山崎福之 2015b 『原本 万葉集 下巻』岩波文庫, 東京: 岩波書店.

**ONCOJ** = The Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (2022 年 5 月上旬閲覧), URL: <https://oncoj.ninjal.ac.jp/>

**講談社** = 中西進 1984 『万葉集 全訳注原文付』, 東京: 講談社.

**私注** = 土屋文明 1982[1949] 『万葉集私注 2 新装版』, 1982[1951] 『万葉集私注 6 新装版』, 東京: 筑摩書房.

- 釋注 = 伊藤博 1996『萬葉集釋注 2』, 1997『萬葉集釋注 6』, 東京:集英社.
- 集成 = 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 1976『新潮日本古典集成 萬葉集 1』, 1980『新潮日本古典集成 萬葉集 3』, 東京:新潮社.
- 新編全集 = 山口佳紀・神野志隆光 1997『新編日本古典文学全集 1 古事記』, 小島憲之・東野治之・木下正俊 1994『新編日本古典文学全集 6 万葉集①』, 1995『新編日本古典文学全集 8 万葉集③』, 中野幸一 1999『新編日本古典文学全集 14 うつほ物語①』, 東京:小学館.
- 全歌講義 = 阿蘇瑞枝 2006『萬葉集全歌講義 第二卷』, 2010『萬葉集全歌講義 第六卷』, 東京:笠間書院.
- 全集 = 小島憲之, 木下正俊, 佐竹昭広 1971『日本古典文学全集 2 萬葉集一』, 1973『日本古典文学全集 4 萬葉集三』 東京:小学館.
- 全注 = 西宮一民 1984『萬葉集全注 卷第三』, 稲岡耕二 1998『萬葉集全注 卷第十一』, 東京:有斐閣.
- 体系 = 高木市之助・五味智英・大野晋 1957『日本古典文学大系 4 萬葉集一』, 1960『日本古典文学体系 6 萬葉集三』 東京:岩波書店.
- 注釋 = 澤瀉久孝 1967『萬葉集注釋 卷第三』, 1968『萬葉集注釋 卷第十一』, 東京:中央公論社.
- 日本方言大辞典 = 徳川宗賢[監修]・徳川宗賢・佐藤亮一・大岩正伸 1989『日本方言大辞典』, 東京:小学館. (JapanKnowledge で検索・閲覧)
- 日本歴史地名体系 = 1979—2004『日本歴史地名体系』, 東京:平凡社. (JapanKnowledge で検索・閲覧)
- 日国 = 2000—2002『日本国語大辞典』第二版, 東京:小学館. (JapanKnowledge で検索・閲覧)

#### 参考文献 (ラテン文字順)

本稿はイタリック体をいっさい使用しないことにした。

朝野聖園 1997「古代日本における牛の飼育に関する考察」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43(4) 19—29.

[Bentley, John R. 1997 **Mo and Po in Old Japanese**, MA thesis, at University of Hawai'i at Mānoa. 子引き]

平子達也 2021「『日本祖語について』と『日本祖語の再建』——その継承と発展に向けて——」『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』, 横浜:開拓社.

平野邦雄 1991「『靈異記』における牛・馬の原像」『日本靈異記の原像』7-26, 東京:角川書店.

ホイットマン, ジョン 2016「日琉祖語の音韻体系と連体形・已然形の起源」『琉球諸語と古

- 代日本語——日琉祖語の再建にむけて』, 東京: くろしお出版.
- 井出至・毛利正守 2008 『新校注 萬葉集』 和泉古典叢書, 大阪: 和泉書院.
- 五十嵐陽介 2021 「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』, 横浜: 開拓社.
- 石橋茂登・市大樹・竹内亮・富永里菜・小谷徳彦 2003 「044 石神遺跡(第 15 次)の調査-第 122 次」『奈良研紀要』, 橿原: 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所.
- 伊藤博 1974a 『万葉集の構造と成立 上』 古代和歌史研究 1, 東京: 塙書房.  
——1974b 『万葉集の構造と成立 下』 古代和歌史研究 2, 東京: 塙書房.
- 犬飼隆 2005[1978] 「音韻の対立が解消したあの上代特殊仮名遣いの行方」『上代文字言語の研究 [増補版]』, 東京: 笠間書院.  
——2005[1989] 「古事記のホの仮名の二種の字体」『上代文字言語の研究 [増補版]』, 東京: 笠間書院.  
——2008 『木簡から探る和歌の起源: 「難波津の歌」がうたわれ書かれた時代』, 東京: 笠間書院.
- 鏡味明克 1984 『地名学入門』, 東京: 大修館書店.
- 菊池義裕 1993 「死の諸相」『万葉集の民俗学』 第三章 四 217—225, 東京: 桜楓社.
- Martin, Samuel E. 1987 **The Japanese Language Through Time**, Yale: Yale University Press.
- Miyake, Marc H. 2003 **Old Japanese: A Phonetic Reconstruction**, Oxon: Routledge.
- 毛利正守 1991 「上代語における母音変化の様相—— $V_2 > V_3$ ,  $CV_2 =$ 助詞」『人文研究』 43(10) 851—873, 大阪: 大阪市立大学文学部.  
——1992 「上代日本語の母音変化—— $V_2 < V_3$ ,  $V_3 = V_4$ の場合——」『萬葉』 143 1—22, 大阪: 萬葉学会.  
——1999 「上代日本語の母音変化—— $V_2 = V_3$ の場合——」『人文研究』 42(5) 335—368, 大阪: 大阪市立大学文学部.
- 村田右富夫 2021 「萬葉集のなりたち」『万葉集の基礎知識』 36—38, 東京: KADOKAWA.
- 中西進 1995 『校訂万葉集』, 東京: 角川書店.
- 奈良文化財研究所 2001 = 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2001 『発掘調査出土木簡概報: 平城宮発掘調査出土木簡概報 36』, 橿原: 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所.
- 小田勝 2015 『実例詳解 古典文法総覧』, 大阪: 和泉書院.
- 澤瀉久孝ほか 1973 『時代別国語大辞典: 上代編』, 東京: 三省堂.
- 沖森卓也 2009 『日本古代の文字と表記』, 東京: 吉川弘文館.
- Osterkamp, Sven 2017 A mokkan perspective on some issues in Japanese historical phonology. **Studies in Japanese and Korean historical and theoretical linguistics and beyond**, 45—55. Leiden: Brill.
- Pellard, Thomas 2008 Proto-Japonic \*e and \*o in Eastern Old Japanese. **Cahiers de linguistique -**

- Asie Orientale** 37 (2) 133-158, France: CRLAO.
- forthcoming Ryukyuan and the reconstruction of proto-Japanese-Ryukyuan. **Handbook of Japanese historical linguistics**, Berlin: DeGruyter.
- 佐野宏 2004 「和名抄郷名にみられる母音脱落を伴う字訓借用例について」『文学史研究』44 59—80, 福岡県：福岡大学.
- 佐々木 1927 = 佐々木信綱 1927a 『新訂新訓万葉集上巻』岩波文庫, 東京：岩波書店. 1927b 『新訂新訓万葉集下巻』岩波文庫, 東京：岩波書店.
- 白石太一郎 2006 「墓と他界観」『列島の古代史——ひと・もの・こと——7 信仰と世界観』169—200, 東京：岩波書店.
- 竹生政資・西晃央 2010a 「万葉集 443 番歌の「牛留鳥」の解釈について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』15(1), 33—48.
- ・—— 2010b 「「にほふ」の語源と万葉集 3791 番歌の「丹穂之為」の訓釈について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』15(1), 49—56.
- Thorpe, Manner L. 1983 **Ryūkyūan Language History**, Doctoral dissertation, at University of Southern California.
- 鶴久・森山隆 1972 『萬葉集』, 東京：おうふう.
- 上野誠 1993 「葬送の民俗」『万葉集の民俗学』第三章 五 226—236, 東京：桜楓社.
- 上野善道 2006 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130 1—42.
- Vovin, Alexander 2020 **A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese (2 vols)**, Leiden: Brill.
- 山口佳紀 1985[1971] 「母音脱落」『古代日本語文法成立の研究』1 節 19—46, 東京：有精堂出版.
- 柳田征司 2003 「複合によって語中に生じた母音連続における母音の脱落」『国語学』54(1), 東京：日本語学会.
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 2018 『小学館 韓日辞典 初版』, 東京：小学館.

## One shakkun in Man'yōshū hints the last age of attributive **-(w)o** in Western Old Japanese

Shiori SHIRATORI

Kenkyūbu, Kadokawa-Dwango Educational Institute

### Abstract

The proto-Japonic attributive **\*-o** is still preserved as **-(w)o** by the inscribed wooden tablets of ‘Old Western’ Japanese (henceforth ‘OW’J) and ‘Old Eastern’ Japanese in Azumauta and Sakimori-uta. According to this note, the same is true of one shakkun in ‘OW’J parts of Man’yōshū. The **NIPODORI=NO** hypothesis, which this note supports, has postulated a cowboys' word **\*NIPO** ‘Stop!’ whose existence is uncertain. Some scholars of Man’yōshū have long been skeptical of this hypothesis. However, if we adopt Masasuke Takefu’s and Akio Nishi’s argument, and assume that the cattle staying in the field was associated with the transportation of goods, it is possible that **NIPO** could be confirmed as shakkun of kungana **\*ni pwo** (留牛), which is a dropped vowel form of **\*ni op-wo** ‘load bear-attributive’. Furthermore, this note argues that the attributive **-(w)o** in ‘OW’J is not poetic, but has a vulgar sense. (留牛鳥) in Man’yōshū 11-2743b was used with the intention of implying a country life, but it is not found in 3-443 (牛留鳥). This may be because the time when ‘OW’J speakers were familiar with **-(w)o** was gradually coming to an end. We can thus confirm that **-(w)o** was being lost from ‘OW’J by the mid-8th century (namely 744). This note shows that not only the inscribed wooden tablets but also the kungana-based notation (訓字主体表記) can provide information on the usage of **-(w)o** in the ‘OW’J.